

爺さんと孫夫婦

ボワロー&ナルスジャック 川口 明百美 訳

妻のサンドリーヌに目をやると、アンジュ・コロンバーニはぎくりとした。妻が涙をぼろぼろと流していたからである。

「いったいどうしたんだ？」

「どうしたかですって？ わかっているくせに、知らないふりして！」

「ひよっとして……じいちゃん？」

「ええ、そう。おじいちゃんよ。面倒見きれないわ」

サンドリーヌは少女のような細かい声でそうつぶやくと、手の甲で涙をぬぐった。ところが次の瞬間、今度は魚屋のおかみさんのような声でどなりはじめたではないか。

「もう、やってらんないわよ！」 頭の上で手を横に振りながら続ける。「もう……まで、怒りが噴き出してるんだからね」

その様子は、海でおぼれかけて、助けを求めて、頭の上で手を振っているように見えた。いや、確かに、サンドリーヌのほうは、アンジュの爺さんのせいで、困惑と気苦労の海に投げ出され、身も心もおぼれかけていたのである。

「まずは落ちつけ」アンジュは言った。「爺さんがどうしたんだ？」

「あなたのおじいちゃん、とんだすけべじいなんだから」

アンジュはやれやれといった表情を浮かべた。

「じいちゃんがすけべだって？ サンドリーヌ、コロンバーニ家の男はあんなもんだ。アントニウスおじさんなんて、臨終の塗油の儀式で（アンジュはそつと十字をきった）すごかった。おじさん近視だからさ、司祭様が着ているスカーフが見えたんだな。気の毒に……。それで……」

「知ってるわ。その話、お葬式でいつもするじゃない」

アンジュは、げじげじ眉をひそめた。

「サンドリーヌ、とにかく言葉には気をつけてくれ。おれが言えば冗談ですむが、おまえの場合は、そうはいかないよ。もう少し礼儀をわきまえないと……。どうせ、すれ違いざまに、じいちゃんがちよつと身体を触ってきたんだろ？ 気にするようなことじゃない。愛情表現のつもりなんだ」

「いいえ、違うわ。跡がつくほどつかんでくるのよ。もう、慣れっただけ……。でもね、おじいちゃんったら、近ごろは身体も洗おうとしないし、ひげだって剃ろうとしないのよ。このままだと、カサゴみたいな顔になっちゃうから。ほかにもいろいろ変よ、最近の

おじいちゃん」

そう言うと、サンドリーヌはアンジュに近づき、たたみかけるように続けた。

「いちばん最近の要求はなんだと思う？ 今度の誕生日には大きなケーキがなくちやいやだつて。しかも、八十本のろうそくつきで。

言い出したら絶対に引かないんだから」

アンジュは青ざめた。最近、爺さんの様子がおかしいと、自分でも思っていたからである。

「わたしが野菜の煮込みを運んでいったとき、あなたも見てたはずよ。おじいちゃんたら、ろうそくを消すみたいに息を吹きかけたのよ。苦しくなるまでずっと。『誕生日の練習だ』と言って。おかげで、ソースが飛んできて、あちこちについちゃったんだから」

アンジュは大きくうなずいた。へどうやら、じいちゃんはかなりまづい状態になっているようだ。ここはひとつ考えてみなければ……アンジュは密輸品の細葉巻シガレットに火をつけると、ドアの前の日なたに置いてあつた椅子に馬乗りになった。

「ねえ、アンジュ。わたしの意見としては……」

サンドリーヌが話を続けようとしたので、アンジュは言った。「ちょっと黙ってくれ。考えてるんだから」

解決の方法はひとつしかない。爺さんを施設に入れることだ。だが、アンジュにとつて、それはあり得なかった。そんなことは問題外である。確かに、爺さんは自分本位で、気難しく、文句も多い。

そのうえ、最近は身だしなみだつて汚らしい。しかし、だからといって、追い出すようなまねはできない。ただ、そうはいうものの、ろうそくを八十本も用意させられるのもうんざりである。へまつたく、今のじいちゃんは、自分が世界の中心だとも思っているんだ！アンジュは心の中で叫んだ。だが……よく考えてみたら、爺さんがそう思うのも一理ある。なにしろ、アンジュがバーの経営に失敗して以来、アンジュとサンドリーヌは爺さんの家に住んでいるのである。爺さんはこの家だけでなく、今は自動車修理工場の経営者に貸しているが、マルセイユに別荘も持っている。年金だつてもらっている。それを考えたら、ろうそく八十本くらいはいたしたことではないかもしれない。アンジュは結論を出した。へそうだ。じいちゃんがよろこぶなら……。相手は八十歳の老いぼれじいさんだ、おそらく先は長くはない。そうなつたら、結構な財産がおれたちの手に入る。それまでと思えばもう少し辛抱できるつてもんだ」

アンジュはつばを遠くに吐いて、細葉巻シガレットの火をかかどで消した。サンドリーヌをドアの近くに呼びよせる。

「ちよつとこつちへきてくれないか……。おれがおまえの身になつたら……」

「まあ、驚いちゃう」サンドリーヌが口をはさんだ。その声には、あいかわらず怒りがこもっていた。「あなたがわたしの身になつてくれるなんて……。そしたら、ペタンクで一日じゆう遊ぶなんてことできないわよ。洗濯して、掃除して、料理して……。それから、常におじいちゃんのお世話。まったく、大きな子どもみたいなものよ。わざと新聞を落として、わたしに拾わせるんだから。ねえ、簡単なことよ。選んでちょうだい。おじいちゃんか、わたしか」

サンドリーヌはそう言うのと、寝室に引っこんでしまった。アンジュは肩をすくめた。いつもこうなのである。東風が吹いたり、セミが耳をつんざくように鳴いたりしても、サンドリーヌはいらいらを爆発させる。そういうときは、声をかけないほうがよい。へそれにしても、「おじいちゃんか、わたしか」などと言い出すなんて、どういうことなんだ。サンドリーヌの言葉を思い出して、アンジュは腹を立てた。ある意味、暴動ではないか。まるで、五月革命だ。体制に対する異議申し立てだ。デモの気配がただよっている。こうなつたら、相手にせず、黙って、放っておくしかない。どんなことがあつても、相手の機嫌にふりまわされてはいけないのである。無条件で、

サンドリーヌを降参させるのだ。

（だけど、困つたぜ……。）つい今しがた、威勢のよいことを考えたわりには、アンジュは小指で耳をほじくつた。いや、ほじくろうとして、悪態をついた。実は、本人も忘れてしまうことがあるのだが、アンジュには左手の小指がないのだ。昔、マルセイユの旧港でパーをやっていたとき、有価証券をめぐる、何がなんだかわけのわからないギャング同士の争いに巻きこまれて、流れ弾にあたつたのである。その結果、小指を九十パーセント失ってしまった。そのことを思い出して、へしかたがないなあ。おれは片手がきかないんだから……。サンドリーヌの手を借りなきや、おれにはなんにもできないんだ。と、大きなため息をつきながら、そう考えたのである。

そういつたわけで、アンジュは途方に暮れながら、二本目の細葉巻シガレットに火をつけた。そして、キッチンに行った。もしかしたらと一縷の望みをかけていたが、それも空しく、サンドリーヌは昼食の準備をまったくしていない。そのかわり、爺さんがソファアで居眠りをしている。その爺さんときたら、パイプが手から滑り落ち、シャツの袖やいたるところに火の粉が飛んでいるではないか。へああ、マリア様。こんな目にあわされるなんて。おれがいつたい何をしたつていうんです。アンジュは爺さんの身体を揺さぶつて、声をかけた。

「ほら、起きろよ、じいちゃん。この家を火事で燃やすなよ。じいちゃんの家だろ！」

まったく、サンドリーヌも、爺さんもどっちもどっちである。とりあえず、爺さんのほうは放っておいて、サンドリーヌのほうをなんとかしなければならぬ。そう思うと、アンジュは忍び足で二階のサンドリーヌの部屋に向かい、扉に耳をくつつけた。すると、中からうめき声としゃくり声が聞こえてきた。そして、トランペットのような、なんとも形容しがたい音も……。この音は……。そう、サンドリーヌが鼻をかんでいるのである。サンドリーヌは泣いているのだ。かわいいように！ だが、もう怒ってはいない。アンジュはほっとして笑みを浮かべた。と同時に、情けなくなった。じいちゃんのでせいで、どうしてサンドリーヌとこんなけんかをしなくてはならないのだ！

アンジュは部屋のドアノブを回した。扉は開いた。ということは、鍵をかけて閉じこもったわけではなかったのだ。かわいいように！ それほど悲しみが大きかったのだ。

「ああ、おれのサンドリーヌちゃん！」

いっぼう、こちらはサンドリーヌ。アンジュの声を聞くと、サンドリーヌはうれしくなって、夫の腕の中に飛びこんだ。というのも

『おれのサンドリーヌちゃん』と言ってくれたのは、新婚旅行の晩以来だったからである。それから長いこと、ふたりは何も言わず抱きあった。なにしろ、こみあげる感情で胸がいつぱいになり、まるでスイカのようにふくらんでしまったのである。現実に戻るのに、持ちあげたスイカを地上に落とすようなやり方をしたら、感情が破裂して、大変なことになるではないか。

しばらくして、アンジュはサンドリーヌのお尻をやさしくポンポンと叩きながら言った。

「おまえがつくったパスタが食べたいな。アンチョビのやつ」

「おろしたてのパルメザンチーズをかけてね」

「それに、うまいトマトとオリーブオイルも」

おお、パスタこそ、ふたたびもたらされた平和の象徴である。アンジュとサンドリーヌは、手をつなぎながら下の階へ戻った。そこでは、爺さんがかすかにいびきをかきながら、うつらうつらしていた。時々、まるで静脈瘤のように血管の浮き出た手でハエを追い払っている。

「見てよ、おじいちゃんのあの姿……」サンドリーヌが言った。「なんだかこちらが悲しくなるわね。さつきはあんなふうに言うんじゃないわ」

それから、サンドリーヌはパスタをゆでながら、テーブルの用意をはじめた。

「年をとるって、悲しいことね……。おじいちゃんは何が楽しみなのかしら？ 起きているときは、文句を言っただけ。文句を言っていないときは、腰が痛い、歯が痛い、そればかり。あつ、アンジュ、トマトの皮ならむけるわよね？」

「やりたいけど……。おれは片手が使えないからね」アンジュは言った。もちろん、使えないのは左手の小指だけなので、要するに、まったくその気がなかったのである。「この手じゃね……」

「ああ、そう……。じゃあ、いいわ……。でも、年寄りの『痛い』っていうのは気まぐれで、よくわからないのよね。きつと、この先、急激に悪くなるんでしょうね。それで、頭のほうも少しずつボケていって、身体もきかなくなっちゃうのよ……。あなたもそのうち、おじいちゃんを車椅子で散歩に連れていけなくなっちゃうらなくなるわよ」

アンジュはがく然ときて、そばにあった椅子に座りこんだ。

「ほんとか？」

「そりゃそうよ、見ればわかるでしょ。そうなれば、ペタンクとおさらばよ。そうね、あと数か月ってどこかしら。いい、車椅子と

いっても、乗せているのは赤ん坊同然、実際はベビーカーのようなものよ。ほら、ティタンのおじいちゃん、覚えているでしょ。車椅子を押してもらいながら、『エスキモーアイスをおくれ、あめとチョコレートも』って言っただけじゃない。あなたったら、見かけるたびにばかにして、まねしてからかった。だけでもう、ティタンのおじいちゃんを笑えなくなるわよ」

「そんなこと、考えもしなかった」

「そう、あなたはなんにも考えていないのよね……。もしわたしが教えてあげなかったら、まったく気づかなかったんですよ！ ああ、ほら、おじいちゃんのこと見てあげて。目を覚ましたみたい」

「おれたちに何かできることはないのか？」

サンドリーヌはパスタをゆでている火を弱め、悲痛な面持ちで言った。

「わたしだってわからないわよ……。でもね、時々、思うのよ。老いぼれるくらいなら、いっそ死んだほうがいいんじゃないかって」

「おい、やめろよ」アンジュは小声で言った。「じいちゃんに聞こえるぞ」

「えっ、なんだって？」爺さんが耳に手をあてながら、大声で聞いてきた。アンジュは答えた。

「なんでもないよ。邪魔しないでくれ。サンドリーヌと話してるんだから」

パスタがゆであがると、サンドリーヌはパテの缶詰も開けた。そして、爺さんを食卓につかせ、三人で食べはじめた。

「おじいちゃん、やせちゃって、もうがりがりね」サンドリーヌが小声でアンジュに話しかけてきた。「気づかなかった？ 見てよ、手首なんか細くて、ニワトリの足みたい。もう少ししたら、ひとりで食事もできなくなるわね。自分がそんなふうになったら、いつそぼつくりいつちやいたいわ。ねえ、アンジュ、もしわたしがひとりで動くこともできなくなったら、そのときは死ぬのを手伝ってちょうだいね」

アンジュは、パスタが先端まで口の中におさまるように、勢いよく吸いあげた。

「なんてこと言い出すんだよ！」

「あら、わたしは真剣よ」サンドリーヌが答えた。「状況が状況なら、死なせてあげるのは愛の証あかしだわ……」

爺さんがまた、いらいらしながら言った。「えっ？ サンドリーヌはなんと言ったんだ？ おまえたち、もっと大きな声でしゃべってくれ」

しかし今は、爺さんにかまっているどころではないのである。アンジュは食べるのをやめた。あごの先にトマトソースのついた顔が、青ざめていく。

「サンドリーヌ」アンジュは声をひそめて言った。「おまえがほんとは何を言いたいか、おれにわからないとでも思ってるのか！」

サンドリーヌは答えた。

「だって、おじいちゃんのためだもの」

「え？」またもや、爺さんが尋ねてきた。「誰のためだつて？ わしにも知る権利はあるだろ？ ここはわしの家なんぞぞ！」

それから、三人は無言のまま食事をおえた。

サンドリーヌが食器を洗っている間、アンジュのほうはというと、庭のエノキの木陰で状況を公平に判断しようとしていた。確かに、サンドリーヌの言い分には説得力がある。だがいっぽうコロンバーニ家では、そんな話は口にするのさえ許されず、一度だって耳にしたことがない。なにせそれはつまり、年若い身体の自由がきかないのなら、その苦しみは短くしてやってもよいということなのである。しかし、アンジュは思った。へじいちゃん自身は苦しいと思ってるのか？ 実際、爺さんは四歳児のように食べ、赤ん坊のように眠る。ほかの年寄り同様、だいぶ弱ったようには見える。それでも

まだ、達者ではあるのだ。アンジュはどうしても、サンドリーヌが間違っているとしか思えなかった。とはいえ、サンドリーヌがうんざりして、故郷のコルシカ島に帰ってしまう恐れもあった。そんなことになったら、アンジュはいったいどうしたらよいというのだ？ 左の手が不自由で、ろくに仕事もできないというのに。

孫のアンジュと爺さんが一緒に暮らす、それが家族のしきたりである。しかし、アンジュはサンドリーヌとも一緒に暮らしたい、愛しあっているのだから。いっぽうに家族のしきたり、もういっぽうに夫婦の愛、このふたつを天びんにかけたら、さて、どちらに傾くだろうか？

ここでアンジュは、少し昼寝をした。頭の中をすっきりさせようとしたのだ。そして昼寝から覚めたとき、アンジュの心は決まった。サンドリーヌとの話しあいはない。利口なサンドリーヌのこと、もうすでに何か策を考えているに違いないのだ。アンジュはうす笑いを浮かべるだけだった。実をいえば、少し怖気づいていたのである。

そして、夕食になった。サンドリーヌはサカナから骨を取り除いて皿に載せると、爺さんの前にさし出した。そして、サンドリーヌにとっては極上の愛想よい声で言った。

「ねえ、おじいちゃん、今度キノコ料理をつくろうかと思うんだけ

ど、どうかしら？」

キノコと聞いて、爺さんの目が輝いた。いっぽうアンジュは、髪の毛元から汗が流れ落ちるのを感じた。キノコ……それこそが、サンドリーヌの考えた方法だったのである。そして、その方法には危険もあった。爺さんひとりにキノコを食べさせたら、疑いが残る。

だから、三人全員でキノコを食べるというのだ。アンジュは思わず、自分の皿を遠ざけてしまった。それを目にしたサンドリーヌが訊いてきた。

「あら、わたしのつくった料理、まずいの？」

まったく、サンドリーヌというのは！ いつでもどこでも怒りを爆発させて、すかさず反撃に出る態勢が整っているのである。なんという女なのだ！

「まさか、そんなことないよ。うまいに決まってるじゃないか。でも、あんまり腹がへってなくてさ……」

アンジュがそう答えると、爺さんが言った。

「わしは、おかわりするぞ」

その顔には、「おまえに勝ったぞ」とでも言いたげな表情が浮かんでいた。アンジュは心の中で毒づいた。へじいちゃんなんか、キノコ食って、くたばっちゃうまえ！ それにしても、キノコで毒殺するなど、

サンドリーヌはどこから考えついたのだろうか。アンジュは、サンドリーヌが爺さんを寝かしつけるのを待って、おそろおそろ尋ねてみた。

「この季節のキノコでいいのか？」

「ええ、そうよ」サンドリーヌがきっぱりと言った。「九月の満月。そのころが最高の」

「どこにとりにいくんだ？」

「オバーニュの近くの丘よ。よくとれるとこ、知ってるの」

「ヤマドリダケだろ。でも、それって、人には害がないんじゃないかなかったっけ？」

「ほかにあるのよ。もつと高いところには、キ……」

サンドリーヌはキノコの名前を言いかけたが、急に顔を赤らめ、言葉につまった。

「名前は知ってるのよ……。でも、口に出したくないわ」

「ああ、あの男のなんとかに似てるっていう……」

「そう、あの大きなキ……キンタマダケよ！」

このキノコ、本当はタマゴテングタケというのだが、サンドリーヌは正式な名前を知らなかったのである。それはともかく、キンタマダケといえは、猛毒があることで知られているのだ。アンジュは

うるたえ、本人も気づかぬうちに布巾を手にとり、グラスをふき出していた。

「おじいちゃんは食いしん坊だから、二個か三個は食べるはずよ。

でも、わたしたちはほんのちよつとかじるだけにしておくの。そうすれば、ちよつと気分が悪くなる程度ですむわ」

アンジュの手からグラスが滑り落ち、足元で割れた。

「いやだよ。そんなの口にするなんて……」

アンジュは腹に手をあてながら言った。

「いやなら、わたし、荷物をまとめて実家に帰るわよ」

その切り返しに、アンジュは、グラスをふいていた布巾で自分の額をふき出していた。それでもサンドリーヌは、容赦なくおも続けてくる。

「古い喪服は処分したほうがいいわ。新しいのを買ってあげる。長持ちするのがいいわね」

アンジュはもう、サンドリーヌが恐ろしくさえなってきた。

「じいちゃん、苦しむだろうな……。それに、おれたちも……」

アンジュはつぶやいた。すると、サンドリーヌがなだめすかすように言った。

「わたしたちなら大丈夫。船酔いみたいなものよ。すぐにおさまる

わ」

「そうかな……」

アンジュはただ従うしかなかった。

翌日、サンドリーヌが長距離バスに乗ってキノコをとりに出かけてしまうと、爺さんの世話はアンジュがなんとかこなした。アンジュはともすると、お払い箱にしなくてはならない老馬にするように、「長いこと世話になったな」と爺さんの首を叩いてやりそうになった。アンジュがこれほど思いやりやいたわりの気持ちを抱いたことは、かつて一度もなかった。アンジュの頭の中に、商売がうまくいった栄光の時代のことよぎった。モロッコのタンジエでアメリカ煙草の密売をし、マルセイユで《バー・デ・ジル》を営営していたあのころ……。アンジュ・コロンバーニは王様だった。だが、残念なことに、金勘定が得意ではなかった。おそらくサンドリーヌにはそこが許せなかったのだ。なぜなら、金のこととなったら、サンドリーヌはお手のものだからである。

やがて夜になると、サンドリーヌが最終バスで帰ってきた。ばんばんにふくらんだ買い物袋をさげている。

「じいちゃんなら、寝てるよ」

アンジュがそう言うと、サンドリーヌは買い物袋の中身を食卓の上にあけた。たくさんのキノコの中から、アンジュはすぐにキンタマダケに目がいった。

「これを二つ、ほかのキノコと混ぜておじいちゃんに出すわ」

サンドリーヌが言った。

「二つも？ ちよつと多くないか？」

サンドリーヌは肩をすくめただけだった。アンジュの意見には、耳を貸そうともしないのである。どうやら、料理の達人サンドリーヌの嗅覚が「二つでちょうどいい」と耳打ちしているらしい。それから、サンドリーヌが慎重にキノコを調理しはじめたのだが、爺さんへの最後の敬意として、そこにはたつぷりのにんにくが入れられた。アンジュのほうはその晩、一睡もできないまま、朝を迎えた。

昼が近づくと、昨日つくった料理を、サンドリーヌが温めなおした。キノコのよい香りがキッチンに広がる。おいしそうなにおいだけだよってきたので、爺さんはもうたまたまなくなり、そわそわし出した。

「すぐに準備しますから、もう少しだけ、じつとしてくださいね」

サンドリーヌが爺さんに言った。「まったく、いつだってわたしにっ

きまとして、邪魔ばかりするんだから」

アンジュは沈痛な面持ちで、食事の準備がすむのを待った。だが、もちろん気が気ではなかった。頭の中には、早くも翌日の新聞の見出しが浮かんでいたのである——毒キノコ食べ、三人死亡——。

「おじいちゃん、できましたよ！」

サンドリーヌが声をかけた。そして、爺さんを食卓につかせ、首にナプキンをかけてやった。食卓に置かれた鍋から湯気が立っている。

「おじいちゃんの分をよそいましょうね」

サンドリーヌがそう言って、爺さんの皿にたっぷり料理をとりつけた。

「多すぎるよ」

アンジュは口をはさんだ。

「そんなことない！」爺さんが叫んだ。「わしはキノコが大好きなんだ」

「あらそう、よかったわ」サンドリーヌは爺さんにそう答えると、今度はアンジュを見て言った。「ほら、あなたも、冷めないうちに食べて」

アンジュは顔が真っ青になり、胸もむかむかしていた。毒のなき

ようなキノコを選びながら、ちびちびと口の中に運ぶ。そんなアンジュをしりめに、サンドリーヌはばくばくと食べている。

「おじいちゃん、もう少しおかわりします？」

サンドリーヌが爺さんの皿をふたたび料理でいっぱいになると、爺さんは入れ歯をかちかち鳴らしながら、たどたどしく言った。

「サンドリーヌ、お、おまえは、い、いい、よ、よ、嫁だよ」

「もう耐えられない……」アンジュは心の中でつぶやいた。息がつまりそうになり、ナプキンを口にあてながら激しくせきこんだ。そして、呼吸を落ちつかせようと席を離れた。へだめだ、こんな計画、うまくいきっこない！しかし、そう思いながらも、必死で自分に言いかけた。へこれが犯罪とみなされることなんてないんだ。三人とも毒キノコを食べて、危険にさらされるんだから。不注意、軽率、へま、そう判断されておわりだ。そう、これはへまなんだ——うっかりして、毒キノコが料理に混ざった。みなでその料理を食べた。あとはその毒キノコが誰にあたるか、ロシアンルーレットだ」

気をとりなおして、アンジュは食卓に戻った。爺さんはチーズを食べ、機嫌もよく、とてもくつろいだ様子をしている。それから、締めワインを飲みおえると、いつものソファアに座り、昼寝に入った。サンドリーヌは後片づけをはじめた。

「何か気持ち悪い感じある？」

アンジュはひそひそ声でサンドリーヌに尋ねた。

「まだよ」サンドリーヌは答えた。「そのうち来るわよ」

その言葉どおり、しばらくすると、三人とも調子がおかしくなった。冷や汗が出て、足がふらつき、吐き気に襲われたのである。

「モルツチの店に行つて、医者に電話してもらつて」

サンドリーヌが苦しそうに言った。モルツチの店というのは、通りをはさんだ向かい側にあるビストロである。アンジュは気持ち悪さに顔を引きつらせながら、ふらつく足でそこへ向かった。そして、倒れこむように店に入ると、助けを求めた。

「うちの……みんな……死にそう……。キノ……キノコ……」

モルツチの店は、それから大騒ぎになった。居あわせた客たちが、大慌てでアンジュたちの家へ押しかけた。ゲームの最中だった客などは、手にカードを持ったままである。

「牛乳を飲むといい」

誰かが言った。すると、別の誰かが反論した。

「いや、まずは吐かせたほうがいいんだ」

いっぽう、店主のモルツチはこう言った。

「強烈なパステイスをぐいっと一杯、それがいいよ。アルコールは

胃を洗浄してくれるんだ。コラツロのことを思い出すよ。ほら、知ってるだろ……いや、バウメット刑務所に入っているやつじゃなくてさ……」

そんな中、ペレグリーニ医師が到着した。ペレグリーニ医師は、まず助けにきた人たちに玄関で待つよう言い、それから鍋の中に残っていたキノコ料理のにおいを嗅いだ。そして、急いでアンジュの診察にとりかかった。

「あなたは症状が軽いようですから、私に手を貸してください。おじいさんをベッドに横にしなければなりません。もうおわかりかと思いますが、おじいさんの症状がいちばん重いです……。さあ、しっかりしてください。ここがすんだら、あなたは奥さんを見てあげてください。あなたより症状が出ていますが、我慢されています」

アンジュとペレグリーニ医師は、爺さんの身体をふたりで必死に持ちあげ、なんとかベッドに寝かしつけた。爺さんは死に瀕していた。それでも、ペレグリーニ医師は医者として何をやるべきかよくわかっていた。患者の状態をしっかりと見きわめ、胃を洗浄し、注射をする。そして、アンジュとサンドリーヌには寝ているように言った。

「間もなく看護師が来ます。あなた方ふたりは大丈夫、ちゃんとうくなりません。しかし、おじいさんは……あまりよくありません」

「先生、おじいちゃんひとりでほとんど全部、食べてしまったんです」

サンドリーヌがつぶやいた。

「高齢ですからね。子どもよりも症状が重くなりやすい」ペレグリーニ医師は答えた。「明日また来ます。あなたがたのほうは、看護師のネリーが必要な処置をします。症状が軽かったからといって、あまり無茶はしないように……」

ペレグリーニ医師はふたりと握手を交わし、帰っていった。するとすぐさま、アンジュとサンドリーヌは、爺さんの部屋へ様子を見にいった。とはいえ、頭痛とめまいにたえながら、はうようにしてたどりついたのである。

「ほんとだ。くたびれた顔してるな」

爺さんを見て、アンジュはつぶやいた。サンドリーヌが言った。

「今夜を越せないんじゃないかしら……」

だが、翌日、爺さんはまだこの世にいたのである。唇が何か言おうとして動いているが、声にならない。それでも、瞳には命のとも

しびが残っていた。(わしはまだ生きておるぞ)そう訴えているかのよう……。そばには看護師のネリーがつきそっていた。

「このまま、寝かせておいてあげてください。夕べよりはよくなったと思います。遠くからそっと見るだけです」

アンジュとサンドリーヌは半開きになったすき間から、爺さんの様子を眺めた。それから、がっかりしたように、ふたりで顔を見合わせた。すると、サンドリーヌの口から、こんな言葉がもれた。

「ふたつじゃ足りなかったのね……。どうせやるなら思いきって、四つにしておけばよかった！」

夜になり、来客があった。爺さんの旧友であり公証人でもある、ランドルフイである。

「ジョゼフはかなり悪いのかい？」

サンドリーヌはうめくように答えた。

「はい、そうなんです。恐ろしいことになってしまっ……」

そして、あやまって毒キノコを料理につかっ……、みなか中毒を起こしてしまっ……と、説明した。ランドルフイが言った。

「ジョゼフと話せるかな？」

看護師は顔をしかめたが、ランドルフイは食いさがあった。

「ほんの一分ほどだ。私の顔を見れば、ジョゼフもよろこぶ」

ところが、ランドルフィは爺さんの寝室からなかなか出てこなかった。そして、約束の一分を大幅に過ぎたころ、深刻そうな表情を浮かべながらやっと出てきた。その顔を見て、廊下で待っていた看護師が緊張した顔をした。アンジュとサンドリーヌも身をひきしめる。いよいよそのときが来たかと思つたのである。すると、ランドルフィがふたりの肩に手をかけ、爺さんの部屋から離れたところに連れていった。

「まったくもって、よくないようだな……」ランドルフィが言った。「正直なところ、ジョゼフはもたないと私は思う……。となると、公証人としてやるべきことをやらねばならぬ。きみたちに話がある。しかし、まだ、われわれの間だけの話にしておいてほしい。約束できるかね？」

「約束します」

アンジュとサンドリーヌはそろって答えた。

「よろしい。きみたちのおじいさんには、トゥーサン・ネグローニという、二十年前からアルゼンチンに住んでいるところがある。おじいさんから聞いたことはないかね？」

「いいえ、まったく」

サンドリーヌがげんそうに答えた。

「そうか、ジョゼフもつまらない隠し事をしたもんだな……」ランドルフィは言った。「そのいところというのが、ただ者ではない。アルゼンチンで大富豪になったのだ」

ランドルフィのこのひと言は、火の玉となって、アンジュとサンドリーヌに打ちこまれた。ふたりは身動きひとつできなかつた。声も出せない。そう、ひと言でいえば、固まってしまったのである。ランドルフィが続けた。

「実は、このいとこのトゥーサン・ネグローニには、きみたちのおじいさんしか相続人がいないのだ。ただし、遺産を相続するには条件があつて、いとこが亡くなったとき、おじいさんが存命でなければならぬ。だが、そのとき、おじいさんがもう亡くなっていたら、財産は慈善団体へ寄付される。まあ、当然といえば、当然の話だ。というわけで、きみたちにとっては皮肉な結果になってしまうかもしれない。トゥーサン・ネグローニは今、九十二歳だから、普通ならおじいさんのほうが長生きするはずだった。しかし、よりによって毒キノコにあたつてしまうとは……。このままだと……。とにかく、話はわかつてもらえたかね？」

「た、た、大金が……目の前を……通りすぎていく……」

アンジュはわなわなと唇を震わせながら、つぶやいた。サンドリ

ーヌが嗚咽にもならない叫び声をあげ、気を失った。

「はてさて、これはどうしたのだ！」ランドルフイが驚いて言った。

「さあ、アンジュ、手を貸してくれ」

ふたりはサンドリーヌの意識が戻るよう、呼びかけたり、ほおを軽く叩いたりした。すると間もなく、サンドリーヌの意識が戻った。

目を覚ますやいなや、サンドリーヌは絶望に身をよじらせながら、ランドルフイに向かって叫んだ。

「お医者さま、おじいちゃんを助けてください！ わたしたちの大好きなおじいちゃんなんです」

「どうやら気が動転しているようだな……」ランドルフイは言った。

「ああ、サンドリーヌ、かわいそうに。私は公証人のランドルフイだ。医者ではないよ」

「わたしがいけないんです」サンドリーヌはうめくように言った。

「大丈夫だと思っただんです。おいしそうだったし……。まさか毒キノコだなんて！」

「ああ、わかったよ。きみに責任はない」ランドルフイが答えた。

「さあ、落ちつきなさい。きみたちふたりのためにも、おじいさんには回復してもらわないとな」

その言葉に、サンドリーヌはベッドの上に座り、目に涙をためた。

「おじいちゃんは助かるかしら……」

「それはペレグリーニ医師に聞いてもらわないと。とにかく、それがやるべきことをやろう」

それが奇跡のはじまりだった。みんなの懸命な看護により、爺さんは回復へ向かったのだ。ある朝、サンドリーヌが驚いた様子でキツチンへ入ってきた。

「ねえ、アンジュ、さっき何があったと思う？ おじいちゃんがね、わたしの身体を触ってきたの。前みたいだね。やっと、危ない状態から抜け出したようね」

「それでも、ほんのいつとこときのことだよ」アンジュはさえない表情で答えた。「なあ、おまえだって、言ったじゃないか。じいちゃんはすぐに頭もボケて、身体もきかなくなるって……。そうなる前に、いつそのこと、どこかの施設に預けたほうがよくはないか？」

「まあ、ひどい！」

サンドリーヌは怒って言った。それから、生地をこねはじめた。

「何をつくってるんだ？」

アンジュは尋ねた。

「ケーキよ。ふん、こんなのつくったって意味ないって言うんでし

よ……。だから、そうやって手をぶらぶらさせて、突っ立って見て
いるだけなのよ、いつもみたいだね……。さあ、ろうそくを買って
きてちょうだい。八十本。お代はあなたが払ってちょうだいね」

しばらくして、爺さんがテーブルについた。テーブルの上には、
サンドリーヌの焼いたケーキがあった。もちろん、明かりのついた
ろうそく八十本つきで。爺さんがろうそくを吹き消そうとすると、
サンドリーヌも爺さんにほおをよせ、一緒に息を吹きかけた。

「おじいちゃん、おめでとう。堂々とした消しっぷりね。さあ、ア
ンジュ、ケーキを切ってちょうだい。おじいちゃんのは大きく……
そう、そのくらいがいいわ。おじいちゃんはお腹がすいているみた
いなよ。そうよね、おじいちゃん」

さらに数日が過ぎると、爺さんときたらそれはもう、まるで王様
のようにわがまま放題だった。とくに、食べる物についてはうる
さかった。やれ、タイが食べたいだの、イセエビが食べたいだの……

「な、なんだって！」アンジュはいらいらして、言葉をつまらせた。

「イセエビだなんて、冗談じゃないよ！」

「冷静になってよ、アンジュ」サンドリーヌが言い聞かせるように

言った。「あなたのおじいちゃんじゃないの！」

爺さんを見舞いに、近所の人もときおりやってくるようになった。
その人たちは、爺さんの元氣そうな顔を見ると、決まってサンドリ
ーヌを呼びよせてこう言った。

「サンドリーヌ、おじいさんの面倒を献身的になさって、あなたっ
て本当にすばらしいわ。おじいさんもきつと、ありがたく思ってい
らっしゃるわよ」

サンドリーヌは今や、爺さんのお陰で鼻たかだかである。だが、
爺さんときたら、ひげを伸ばしたままで、パスタソースや卵の黄身
がつくとふいてやらねばならず、前よりもいっそう手間がかかった。
そのうえ、ふいてやるるとき、スカートの下に手を入れてくるのだ。
それでもサンドリーヌは、爺さんの手をぴしゃりと叩いて、笑顔で
こう返した「いい子にしてね、おじいちゃん」

そして、またひげをきれいにふいてやるものだから、爺さんのひ
げはぴかぴかになった。あれ以来、たびたび訪ねてくるようになって
た公証人のランドルフィが、あるとき、こう言ったくらいである。

「すごいひげだな。ビクトル・ユーゴーみたいだ」

サンドリーヌはうれしくて顔を赤らめた。まるで街の人全員の前
で表彰されたような気分になったのだ。なにせ、あの大文豪、ビク

トル・ユーゴーである！ でも、確かにそうだった。爺さんのひげは真っ白で美しく、人目を引いた。それはいわば、サンドリーヌの作品〕なのである。それからというもの、サンドリーヌは爺さんのひげの手入れを念入りにするようになった。まるでひげがトレードマークの著名人であるかのように、ブラシまでかけてやった。

いっぽうアンジュは、サンドリーヌからほったらかしにされるようになった。

「くそ、むかむかくる」アンジュはぐちった。「邪魔者はじいちゃんじゃなくて、おれのような気がしてきた……」

それから、ビストロで過ごす時間がしだいに増えていった。

そんなアンジュにかわって、ランドルフィがサンドリーヌを手伝い、爺さんの面倒を見るようになった。その日も、ふたりで爺さんを庭に連れていき、エノキの木陰に置いてあるお気に入りソファに座らせてやった。そこで、ランドルフィがひと息つくくと、

「アルゼンチンにいる、おじいちゃんのことですけど……」

サンドリーヌが声をひそめて尋ねた。「その後、何か連絡はあったんですか？」

ランドルフィは答えた。「あまり元気がないようだよ」

それを聞くと、サンドリーヌは顔を輝かせ、家の中へ戻っていつ

た。ランドルフィは爺さんのそばに腰かけ、葉巻に火をつけた。すると爺さんが、しわしわの顔をにやつかせて言った。

「おまえ、まんまとやつらをだましたな。アルゼンチンのいとは！ はっはっは！ やつら、このわしをはめようとおって、そはいくもんか！ しかし、おまえがそんな嘘をつけるとは思わなかったよ」

「ジョゼフ、ほどほどにしておけよ」ランドルフィは言った。「ふたりは若いが、こちらは年寄り。若い連中が年寄りどもを邪魔に思うのはあたりまえじゃないか。自然のなりゆきだよ。われわれも昔は若かった。そして同じように、むちゃなことをしただろ……」

爺さんとランドルフィは物悲しそうに、遠くを見つめた。それはまるで、遠い昔を見つめているようだった。

そのころ、家の中では、サンドリーヌがキッチンでミネストローネをつくっていた。歌を口ずさみ、将来への期待で胸をふくらませながら……。

〈完〉

原題 ACROCHE-TOI, PÉPÉ Boireau Narcejac
訳者紹介 『マップチェの女』（共訳 早川書房）ほか